



私の仕事

国連難民高等弁務官の十年と平和の構築

草思社・本体価格一六〇〇円

緒方貞子著

九〇年代日本の小さな巨人
先例なき時代に求められるもの

評者 北村行伸・一橋大学経済研究所教授

この本の目次

- はじめに
- I ジュネーブ忙中日記
一九九三年／一九九四年
- II 国連難民高等弁務官の十年
国連難民高等弁務官着任一カ月／難民・国内避難民・経済移民／カンボジア和平の課題／冷戦後の世界と難民／人道的介入をめぐる／北欧の災害救援システムとの連携／国境と難民／難民がなくなる日は来るのか／コンボが突きつけた課題／難民問題の解決へ向かって／難民保護の十年を振り返る
- III 難民援助の仕事語る
経済大国から人道大国へ／人道援助とPKOの運動／緊急的人道援助はどう行われたか／アフガニスタン復興支援国際会議を終えて
- IV 外交演説・講演——平和の構築へ
グローバルな人間の安全保障と日本（ほか）
- V 世界へ出ていく若者たちへ
世界へ出ていく若者たちへ

失われた一〇年といわれる一九九〇年代ではあるが、地道な努力を続けてきた日本人はたくさんいる。そのなかでもとりわけ、わが国の国際貢献を最も目に見えるかたちで実践したのが緒方貞子氏であろう。九一年二月に国連難民高等弁務官に着任し、二〇〇〇年末に退任、その後、二〇〇二年一月にアフガニスタン復興支援国際会議共同議長を務めるまで、まさにこの一〇年間を駆け抜けた小さな巨人である。

概念を実践する手腕

また、この一〇年間の経験を経てたどりに着いたとされる「人間の安全保障」という概念については次のように定義されている。「人間の安全保障というのは、安全保障を人権、人道、保健衛生、開発、環境、教育等幅広い人々の営みの側面から考えるものである」「具体的には、安全保障の対象を個人の安全保障に置きかえるという意味ではなく、人々が暮らす共同社会（コミュニティ）の安全保障を基盤とする」ということである。そしてその結果として、「人々の保護と

能力育成に直接安全保障の目向けられるならば、国家の安全保障は根幹から強化される」と主張している。

このように聞かせることよい。手にとるようにおしえてくれて大いに参考になる。そして、先例のないような事件には、高橋是清さんのところに行くに限る。必ず即刻い考えを出される」と述べたということである。

著者は、この一〇年間を振り返って「私が十年の間に、中近東、バルカン、アフリカ、アジア、中南米各地での紛争をみていて思ひはじめたことは、国家が権力によって領土を完全に保全し、国民の生命の安全を完全に保護できる時代は終わったということである。紛争がおこる前に、飢え、病気、宗教的民族差別、社会的不正で苦しむ市民を直接支援する国際的な仕

では、その具体的な仕事とはどのようなものだったのだろうか。緒方氏は、「いろいろな国にでかけていき、その指導者を取り引きをして、その社会のなかで不当な扱いを受けている人々を守るために数々の交渉を重ねてきた。いわば、犠牲者の保護者のようなかたちでの仕事である。つねに難民という犠牲者の保護者として、保護を実施するための交渉に当たる。次に、保護者としていろいろなところへ行つて拠出金を含む支援を集める」ということである、と自ら要約している。

本書を讀んでいて思い出したのは、猪木武徳氏が『自由と秩序』（中公叢書）のなかで紹介されていたエピソードである。それは、井上準之助（金解禁時の大蔵大臣）が「先例のあるような事件が起きたら山本達雄（西園寺内閣の大蔵大臣）さんのと

ころに聞きに行く」といふ。手にとるようにおしえてくれて大いに参考になる。そして、先例のないような事件には、高橋是清さんのところに行くに限る。必ず即刻い考えを出される」と述べたということである。

現代社会は三〇年代と同様に先例のない事柄が連続して起こっている。このようなときに頼りになる人材が不足しているとはよくいわれることである。時代の要請に応えた高橋是清氏や緒方貞子氏に共通して見出される点は、その国際的な経験が地に足のついた現実主義に結び付いているということであろう。

最終章の「世界へ出ていく若者たちへ」では、若者に好奇心と開かれた心、そしてコミュニケーションの手段としての語学力を身につけることを説いているが、それはまさに著者自身が積み重ねてきた経験から出てきた、貴重なアドバイスとなっている。

著者のプロフィール
おがた さだこ
1927年東京生まれ。第91
国際政治学者。第8代国連難民高等
弁務官（在任は91～2000年）。聖心
女子大卒。米国ジョージタウン大
学院修了。カリフォルニア大学バークレー校で政治学
博士号を取得後、国連総会日本政府
代表顧問、76年には、日本初の女性の国連代表
部公使に就任。82年に国連人権委員会日本政府
代表、89年に上智大外国語学部長。読売国際協
力賞、マガサイサイ賞など受賞、2001年に文化
功勞者。



「人の生命を助ける」というのが私の使命の原点でした。生きてさえいれば、誰らには次のチャンスが生まれるのです。